

『平家物語』を読む

— 古典講読に通じる授業実践 —

北川 真一郎

はじめに—『平家物語』の学習で目指すこと—

「古典文学」ということはを奉じながら、学習の場に「文学」を読んでいるという昂揚を感じられないことにもどかしさを覚えてきた。勢い、自らの古典体験を熱っぽく語って悦に入っている自分自身を反省したりもした。古典の学習が言語事項の習得や文学史的な知識の蓄積に終始せず、あるいはまた、指導者の一人よがりな詠嘆の押し売りになれず、学習者個々の内面に生き生きとした文学体験の像を結ぶようにするためには、彼ら自身が古典作品に対して積極的に発言するのが効果的だと考える。不十分な知識による発言は、古典の曲解につながるといえるのは杞憂に過ぎない。なぜなら、文学作品の読みは、読者の成長にともなつてたえず深められ、発展させられていくべきものだからである。

新学習指導要領では古典分野の重視が明確に打ち出されている。なかでも、「古典講読」の新設は注目に値する。

「講読」という名が、ややもすれば復古的なイメージを引き起こすことに抵抗を禁じ得ないが、ねらいとするところはまさに現在の古典教育の変革を促す画期的なものである。「文章や作品に表れた思想や感情を的確に読み取り、生活や人生について考える」（内容ウ）とは、作品を介して自らと向き合うことをうたつたものであり、こうした態度は、作品への積極的な働きかけを抜きにしては実現されないものである。

以上のような私なりの古典学習観に基づいて、昨年度一年を通して『平家物語』を読んできた。如上の学習観に照らして、『平家物語』は次のような点ですぐれている。

- (1) 言語的抵抗が比較的少なく、発言にいたるまでの労力が軽減できる。
- (2) 登場人物たちの人生がドラマ性に富み、それが表現欲求をかきたてる。
- (3) 文体、物語ともに変化に富み、さまざまな形の表現課題が設定できる。

(4) 「語りもの」としての性質が、音読・朗読にうってつけである。

(5) 歴史的にきわめてダイナミックな時代背景を持ち、それが史料等を使って調べる興味をそそる。

こうした特長をふまえて、活発な学習活動を展開することができれば、おのずから学習者の内に主体的に古典とかわらうとする意識が芽生えてくるはずである。そして、それが「古典の世界」を介して現代という時代とそこに生きる自分を見つめる視点の獲得、態度の涵養につながると考えられる。

授業の実際

〈期間〉 第二学年通年 一九九一年四月～一九九二年三月
〈対象〉 兵庫県立太子高等学校二年選択古典クラス・二単位のもの

四十一名(男子19名・女子22名)

*うち、男子三名が進路変更のため退学。

〈教材〉 東京書籍「平家物語」、その他については、年間指導計画に示す。

〈年間指導計画〉(補として、一、二学期の表現活動を付す)

一学期

単元 武士の登場

一、馬盗人(『今昔物語集』巻第二五・第一二)

二、頼信と盗人(『同』巻第二五・第一一)

三、頼光の郎等、祭り見物のこと(『同』巻第二八・

第二)

* 筑摩書房「国語1」

一学期中間考査(補1)

単元 平家の栄華(以下ことわらない限り「平家物語」による)

一、殿上の闇闘ち(巻第一)——平家時代への跳躍台——

* 新潮古典集成「平家物語」上

(付) 石ノ森章太郎「マンガ日本の歴史」一四

内裏図(貴族たちの誓) 服飾図(地位と名譽のシンボル)

二、平家の栄華(巻第二)

三、鹿の谷(巻第一)

一学期期末考査(補2)

二学期

単元 運命を生きぬく力——合戦の場をめぐる——

一、橋合戦(巻第四)

いくさの証人(梶原正昭「平家物語」講談社現代新書96～98)

二、生ずきの沙汰(巻第九)、宇治川先陣(同)

平家物語(小林秀雄「無常という事」角川文庫64～67)

三、富士川(巻第五)、篠原合戦(巻第七)、実盛(同)

奥の細道(松尾芭蕉「松尾芭蕉集」日本古典文学全集)

四、河原合戦（巻第九）、木曾最期（同）

ポニーに乗った義仲（木下順二『ぜんぶ馬の話』
文春文庫94〜97）

五、忠度都落（巻第七）、忠度最期（巻第九）

琵琶のしらべにのせて（上原まり『わたしの平家
物語』高文研136〜139）

* 独自に編集した小冊子。本文は、完訳日本の古典

『平家物語』一〜四による。

* その他、元範発表には「一二之懸」（巻第九）「敦
盛最期」（同）を、「橋合戦」では「競」（巻第四）
をプリント学習で、「木曾最期」では「四面楚歌」

（『史記』項羽本記）との比較読みをとりあげた。

単元 時代の眼

一、福原遷都（『方丈記』）

* 日本古典文学大系『方丈記・徒然草』

二学期期末考查

二、入道死去（巻第六）

三学期

単元 女たちの平家物語

一、小督（巻第六）* 完訳日本の古典『平家物語』

二、先帝身投げ（巻第一一）、大原御幸（灌頂巻）

学年末考查（補3）

三、建礼門院右京大夫

* 新潮日本古典集成『健礼門院右京大夫集』

（補）

1 「頼信と盗人」の会話部分を、人物の立場、人柄、

その場の心情を考えて、創作的に現代語訳する。

（地の文の訳は指導者）

2 「殿上の闇闘」の学習をふまえて、永積安明『平家
物語を読む』（8〜27）を読み、平忠盛について論

じる。

3 「小督」の学習をふまえて、小督の君になったつも

りでインタビューを創作する。（インタビューは

指導者）

次章では、二学期に行った単元「運命を生きぬく力」に

ついて、その概略を紹介する。

単元 運命を生きぬく力—合戦の場をめぐる—

本単元の学習は、小冊子「運命を生きぬく力」をテキスト

トとして、グループによる研究、発表という形で展開した。

これが、一年を通じた取り組みの中心となるものである。

当初の計画では、二学期の前半、中間考查までに終了する

予定であったが、学校行事による授業変更が相次ぎ、また

指導者自身の不慣れもあって、ほぼ二学期すべてを費やす

はめになった。（注1）

一、学習目標と教材選択

単元の学習目標を明らかにするために、小冊子「運命を
生きぬく力」の冒頭に次のような文章を書いた。

歴史という大河は、流れに棹さず人間を翻弄する。豊かでおだやかな流れが、時として逆巻き、しぶきをあげ、激流となって流れ下る。平家物語の描く時代—中古から中世への転換期—は、まさにそのような難所であった。

竜頭鶴首の舟をうかべた、平安四〇〇年の静かな流れが、渦を巻く激流となって荒れ狂う。すさまじい勢いですべてを飲み込み、すべてを押し流す。雅びの舟に栄華の日々を紡いできた貴族たちがなすすべもなく身をすくめるなかで、果敢にもこの流れにいとむ者たちがいた。武士の登場である。彼らの幾人かは、荒々しい流れにもひるまなかつたがゆえに、あるいは、みごとに舟を操つたがゆえに、英雄として、その名を今に伝えている。

しかし、彼らとて、決して歴史の流れから自由であったわけではない。ましてや、その流れを支配し得たわけでは、もうとうない。歴史の流れは、人間の力のおよばぬさだめとしてある。どんな人間でもいずれば死ぬさだめにあるように。一度は死ぬべき運命を背負つたはかない人間が、歴史という無常な流れに立ち向かつていくところに、英雄は生まれるのである。

自らのさだめを自覚することなく、無邪気にたたかひ、そして死んでいった人間を愚かだといって笑うことはできる。また、最期まで新たな運命が開けることを信じてたおれた人間を、幸せ者だつたと慰めることはできる。しかし、既に自分を支配する運命を自覚し、歴史の必然を確認して

しまった人間に出会つたとき、私たちは、そのむごたらしい姿にことばを失つてしまう。そして、彼がその修羅場をくぐりぬけ、最期まで—いや、結果的にいえば最期の瞬間にこそ—生の輝きを失わなかつたと知つたとき、驚きとともに、深い感銘を受けずにはいられないだろう。

平家物語に登場する英雄たちが、滅んでゆくものとして英雄たり得たゆえんもそこになる。つまり、滅びゆく運命をいかに生きぬいたかということが、彼らの人生の証なのである。そして、各々の生きかた、生きる姿がからまりあうところに、さだめとしての歴史にいとむ「人間の歴史」が浮かびあがつてくるのである。

『平家物語』の神髄は、その強烈な「物語精神」(注2)にある。とすれば、まずは、物語作者の人間に対する旺盛な興味・関心を素直にうけとめ、共感することが物語世界の扉を開くことになる。物語作者がおもしろくて仕方がないと感じたものを、我々読者もまたおもしろいと感じる、そんな素朴な文学体験を重ねるなかから、「通奏低音」(注3)としての「諸行無常」が聴きとれれば理想なのだ……。

二、単元構成—小冊子編集のねらい—

小冊子「運命を生きぬく力」は五章構成になつていますが、全体は大きくふたつの部分に分かれる。前半(橋合戦・宇治川先陣)は、中世黎明期の武士の明るさを感じさせる。合戦の場の持つ意味は、単純に勝敗に収斂されていくもの

ではない。「軍場こそ晴れ」という意識が武士たちの闊達なエネルギーの噴出を誘うのである。

それに対して、後半では実盛・義仲・忠度の三人の武将の最期をとりあげた。ぎりぎりの状況に追い詰められていく彼らも、死の瞬間まですべてを賭けて燃焼しつくそうとする点では、前半の兵群像となんら変わりはない。しかし、そこでの彼らが生の閉じめを迎えて、おのおのが担つてきた人間としての問題を明確にし、「人間世界の真実」(注4)を浮き彫りにするありようは、前半の開放的なエネルギーの噴出と対比されることでよりあざやかな印象を読者の脳裏に刻むであろう。

各章には、教材ごとの読解のポイントをおさえた「学習の手引き」を付し、グループ研究のしるべとした。ここでは、紙幅の都合上、「橋合戦」のみを示す。

「橋合戦」学習の手引き

- 一、高倉宮、源頼政の出自・経歴・当時の境遇を調べ、その萃兵の理由を考察する。
- 二、宇治橋周辺の略図を作成し、高倉宮方・平家方の動きを整理する。
- 三、頼政と仲綱が、わざと甲を着なかつた理由を読み取る。
- 四、但馬、明秀、一来法師の戦いぶりを描くうえで、効果をあげている表現を指摘し、分析する。
- 五、「阿弥陀仏申して、奈良の方へぞまかりける」という明秀の戦線離脱に秘められた行動原理について考察する。

六、戦況を一転させたのは、誰のどのような言動であったかを指摘し、そこに表れている考え方を考察する。

「学習の手引き」は、次の四つの作業を含むように配慮して作成した。

(1) 調べる

① 該当箇所に至るまでの経緯をさかのぼって調べる。

② 日本史の概説書・事典・資料集等を使って調べる。

(2) 整理する

図表を作成して、内容を的確に整理する。

(3) 読み取る

教材本文に基づいて、主に登場人物の心情を読み取る。

(4) 考察する・分析する

① 表現上の特徴を指摘し、その意図・効果について分析する。

② 登場人物の考え方、行動原理や作者の思想について考察する。

* 右の作業の前提として、担当箇所の梗概をまとめさせた。

なお、各章末には、参考となる文章を添えた。先入観(イメージ)を揺るがす意外な事実、卓越した読み手の鑑賞、味わい深い芸談に接することで、学習の裾野が広がることを期待してのものである。

三、学習の展開(対応する資料番号を示す。)

(1) 五つのグループに分かれ、各グループが一章ずつ担当

する。

*グループ編成は指導者が行い、代表を決めさせた。代表は、作業の進捗状況を把握し、指導者との連絡の任に当たる。

(2)各教材の梗概と学習の手引きをグループ内で分担し、図書室で一斉に準備を行う。(四時間)

*二時間目の終わりにいったん資料を提出させ、参考文献の使い方、資料のまとめ方について指導した。

(3)発表順に原稿を点検し、個別に指導を加える。

*図書室に参考文献コーナーを特設し、閲覧の便を図った。

(4)指導者の示範発表を聞き、発表の手順を理解する。

(5)発表日前日に、グループ全員で資料を完成し、発表のリハーサルを行う。(資料2く4)

*本文の音読は、人物関係がわかりやすいように、必要に応じて数名で分担した。

*資料を使いながら発表する手順について指導した。

(6)各グループ一時間で発表を行う。

①本文の音読。

②梗概の音読。

③学習の手引きの説明。

④質疑応答。

⑤指導者の講評と補足。

*司会は原則として代表に任せたが、質疑応答の際には指導者が指名したり、質問をなげかけたりせざるを得

なかった。

*発表を聞くものは必ずメモをとるようにしむけた。

*評価表は次の時間に提出するように指示した。(資料5)
(7)学習のまとめと反省の文章を書く。

①これまで学習してきた人物のなから一人、ないしは二人の人物をとりあげて、「運命を生きぬく力」という題で、その生きざまを論じなさい。(資料1)
②次のいずれかの題で、グループ学習をふりかえりなさい。

(a)平家物語を読む楽しみ

(b)どうすれば平家物語を楽しく読めるか

* (a)はすべてのグループの発表が終わった段階で、(b)は期末考査で実施した。

(8)新聞レポートを作成する。(資料6)

本単元で学習した教材を材料にして、新聞形式でレポートを作成しなさい。ただし、とりあげる教材は、自分の担当したものに限らない。

*間に、単元「時代の眼」として『方丈記』をとりあげ、ジャーナリストの草分け、鴨長明の視点を学んだ。

*新聞記事を例に引き、記事のまとめ方を解説し、指導者が「入道死去」を素材にした作品を試作し、参考に示した。

*冬休みの課題とした。提出者は三八名中三〇名。担当箇所以外を選んだ者が六名であった。

*作品は印刷して全員に配布し、学習者の相互評価（最優秀一点、優秀二点を選び、講評文を書く）を中心に、指導者、それに学年の国語科担当教諭二名と教頭に加わっていたらいて、高得点を得た三名を表彰した。

四、反省と課題

かつて、『竹取物語』のグループ学習を流産させている私にとって、今回の試みは勇気のいるものであった。生徒たちがこの学習をどのように受けとめてくれたか、恐いものみたさのような思いで、反省文を読んだ。

・私はこのグループ学習をやると思った時、正直言ってみて、「なんでそんなめんどい事やるんよ」と思いました。しかし実際自分達でいろいろ資料を集めてきて、工夫して文章を作っていると、「これは自分らの力だけでやるんやなー」という喜びというか、誇れるものが生まれてきました。私たちのグループは宇治川先陣をやったんですけど、その資料が探してもなかなか見つからなくて、やっと見つけた時は本当にとつてもうれしかったです。いろいろ先生に注意されながら、文章を仕上げていきましました。表紙の絵を探すのもおもしろかったです。（略）個人学習にはない連帯感やチームワークが必要なんだと思います。他の班もとても上手だったと思います。先生が「あのグループになるほど良くなる」とおっしゃったように、みんな他のグループの発表の長所や短所を参

考にしてだんだんレベルが上がっていきました。平家物語もこういう風に学習すれば、こんなにおもしろいんだと感心しました。（女子）

・グループ学習を振り返って、普通の授業の「教師対生徒」では学べないものを学んだように思います。「生徒対生徒」（友達対友達）だからこそ、自分の思ったこと、考えたことを表現することができ、ライバル意識も高まるのではないかと思います。（女子）

グループ学習は確かに「めんどい」（面倒臭い）。私にとってはそれ以上に、「笛吹けども踊らず」といった事態に対する恐れがあった。しかし、いざ学習にとりかかってしまふと、いざれもが杞憂に過ぎないことを思い知らされた。雑然としたじたばたに引き込まれ、一斉学習からの解放感が次第に自ら学習を模索する前向きな姿勢に変わっていく。発表前日のリハーサルでは、普段ならついで口をついて出る不平・文句もなりをひそめ、音読のおさらいに余念のない姿、手厳しい注文にもくらくらいついてくる真剣な姿が見られた。発表のプレッシャーがライバル意識とせめぎあい、互いの連帯感へと昇華していったと思われる。点数、偏差値による競争には抵抗があるが、グループ学習におけるそれは、「一生懸命聞いてくれる友達が、本当にうれしかったです」「友達がほめてくれたことが、どんなにうれしかったか分かりません」といった学習者相互の信頼関係に支えられている限り、おおいに歓迎すべきものである。自分た

ちの発表をよりよいものにしようという姿勢から出てくる意見は、授業の改善要求として傾聴に値するものが多かった。

・「グループ学習」ということだったが、一グループにたえられた文章の中で個人が家で調べてきたことを発表するだけだったので、あまり「グループ学習」とは言えなかつたのではと思う。(男子)

グループ内で話し合う事前の訓練が不足していた。最近注目を集めているディベートをグループ作りの過程で生かせないものだろうか。

・他の班でやってたところは、前日から本文や口語訳を読んでいないとよく理解できない部分もあった。(略)あらかじめ本文や口語訳を理解してもらってから発表するべきだと思った。(女子)

事前に梗概を配布しておいて発表に臨むか、あるいは、思い切つて一グループあたりの発表に二時間を配当しておけば、学習活動のひとつひとつがより確かなものになったと思ひ返している。

・せっかくグループにわけて学習したのだから、プリント数枚くばつて発表するだけでなく、大きな紙一〜二枚に図や説明をかき、それを黒板にはつて、またそれをさらにくわしく説明するというふうにするれば、もつとグループ学習らしくてよかつたと思う。そして最後には、今までの平家物語をすべて決着するつもりで、一枚の大きな紙に、主な武士達の名前や、その人の生涯などを対比し

て、書き表してみるのもよいと思う。(女子)

微に入り細を穿つた意見である。学習者を本気にさせるためには、らしさの演出が必要である。そのうえで、確かなものをつかんだというおさえを的確に行う。演出力と勘を研かねばならない。

その他にも、「初めて本文を読んでもある程度ならわかるではないか」という素朴な驚きからは、文法学習の行き過ぎがかえつて言語的抵抗感を助長しているのではないかという反省を強いられた。あるいはまた、「図書室に通つて資料づくりをしていたので、図書室におもしろい本や、興味のある本など発見でき、図書室の存在も大きくなつた」「古典全体(特に平家物語)に興味がわいてきた。テレビなどでも『源平合戦特集』などしている」といふ見てもたいという気もちになる」といつた感想には、グループ学習が核となつて、学ぶ姿勢を育ていく實際を知らされ、おおいに勇気づけられた。

グループ学習は測り知れない可能性を秘めている。しかし、その雰囲気は酔つていただけでは、なんの発展性もない。「活動したこと」による充実を超えて、いかに確かなものを獲得させることができるか。今後は、指導のポイントを限定して、生徒たちの改善要求に応えられる方法を確立していきたい。

(注1) 本単元の計画、実施にあたっては、兵庫県立豊岡実業高等学校教諭、今井一之先生の実践報告「(盛者必衰—平家物語の死の諸相—」平成元年度兵庫県高等学校国語科教育講座研究資料」を参考にさせていただいた。

(注2) 石母田正『平家物語』(岩波新書)

(注3) 木下順二『平家物語』(古典を読む一八) (岩波書店)

(注4) 永積安明『平家物語を読む』(岩波ジュニア新書)

【資料1】 実盛と忠度

伊賀 尊 誠

武士は、名替を重んじ、自分の主人のために死に、また、後の世までの恥とならないように、良い意味で名を残せるよう立派にちつてゆくという美学がある。

忠度は平家の大将軍で、「大力の早業」の上、歌道にも優れていたが、平家一門が滅びの道を歩みはじめていて、近々自分も死ぬことになるとさつた時、作った歌に自分の存在をたくして、師事していた俊成にあづけ、その上で合戦にのぞんだ。そうすることによって、平家の大将軍として生きることに専念しようとしたのかもしれない。

実盛は、富士川の合戦で源氏に一矢も射ることなく逃げた恥をばんかいするため、また、篠原の合戦での仲間との約束をはたすため、自分の故郷でもある次の合戦の場の北国で討死にする決心をする。それに先立って、故郷に錦を

かざりたいと、大臣殿から錦の直垂を着るゆるしを得、過去のことをひきずることなく存分に戦えるよう、一人の若武者として戦った。

実盛は古い先みじかいこともあつて、始めたら死ぬつもりでいたのだが、最後まで力いっぱい生きたいといえる。

二人とも死を意識することによって、生きることの意味を認識することができたのではないだろうか。つまり、いつ死ぬかわからないという逆境に立たされることによって、武士道とよばれる誇り高い精神へ昇華していったのだ。それが運命に立ち向かう原動力となつて、立派に生きぬくことができたのだと思う。

(兵庫県立太子高等学校教諭)

